

【実践報告】

当事者視点で学びを捉える

学修支援部門ニューズレターの取材・編集を通して

今福 輪太郎

岐阜大学教育推進・学生支援機構
岐阜大学医学教育開発研究センター

要旨

近年、高等教育では、アクティブ・ラーニングの全学的展開を推進する動きが盛んになっており、その実態把握のために、新たに設置したラーニングコモンズの利用者数や課題解決型学習等の教育手法の導入・実施数の量的調査が主に行われてきた。しかし、教育者や学習者の当事者視点から、実際の経験や認識は明らかにされておらず、教育の質的転換が十分に検証されているとは言い難い。学修支援部門は、教員、事務職員、学生の協働のもと、2018年6月末までにニューズレターを4号発行してきたが、その全てで「学習」に取り組む学生を実際に取材し、彼らの生の声を掲載してきた。本稿は、そのニューズレター発刊に向けた取材内容を概観し、本学のアクティブ・ラーニングを考察するとともに、ニューズレターの編集・発行に学生を関わらせること自体に教育的意義があることを論じたい。

キーワード：アクティブ・ラーニング，ニューズレター，解釈主義，当事者視点，
質的研究アプローチ

1. はじめに

教育現場においてアクティブ・ラーニングの重要性が再認識され、その全学的展開を推進する動きが盛んになり、教育の質的転換に関する議論が多くなされている(山田, 2018)。この動きは、初等・中等教育に限らず高等教育においても同様であるが、その議論の中で使われているアクティブ・ラーニングの概念や定義が、教育手法のことなのか学習者の学習アプローチのことなのか曖昧な場面が散見される。このような状況を踏まえ、岐阜大学では、「アクティブ・ラーニング」を推進する前提として、その定義を下記の通り明らかにした(注1)。本稿でも岐阜大学の定義に従い、学修支援部門ニューズレターの実践報告を

進めていく。

【岐阜大学の定義するアクティブ・ラーニング】

学生が自らを取り巻く課題や自ら見つけたテーマについて個人またはグループで探求する意欲的な学びである。…学生のこうした学びを支援する授業，またはその契機を与える授業をアクティブ・ラーニング志向科目と呼ぶ。

岐阜大学 教育推進・学生支援機構 学修支援部門では、岐阜大学内の学生のアクティブ・ラーニングを促す取り組みの現状把握と推進を目的に、各学部・学科でのアクティブ・ラーニング志向科目の実施数やアカデミックコアの月別利用者数、課外学習での LMS (AIMS-Gifu) の使用状況などの調査を行なってきた (例：加藤，海野，篠田，2016；篠田ら，2017)。この量的調査結果から、岐阜大学のアクティブ・ラーニングに関わる一定の現状と課題が把握できたと考えている。しかし、アクティブ・ラーニングを検証する教育研究においては、これまで心理尺度やサーベイによる定量的調査や実験研究が圧倒的に多く、その経験や学習プロセスの理解に焦点を置いた研究は十分とは言えない (例：Imafuku & Bridges, 2014; Reeves ら，2016)。

次の段階として、「学生自身が自ら探求する意欲的な学び」が達成できているかを理解するためには、各教育場面での学習の質に目を向ける必要がある。これは質的研究の方法論に通じる視点であり、文脈（時，場所，人との関係性など）と切り離して考えることができない経験や教育プロセスの意味を探求することに重きを置く (Neuman, 2013)。Cameron (1963) は、次のような言葉を残している。

Not everything that counts can be counted, and not everything that can be counted counts. — 数えられるものすべてが大切なわけではない。大切なものすべてが数えられるわけではない (注 2)。

つまり、Cameron の言葉が示すように、教育の質的側面を理解するためには、量的、客観的に測定することが難しい個々の学習者や教育者の気持ちや感じ方、意識、価値観、経験を当事者視点から厚く記述していくことが重要であるといえる (Imafuku & Bridges, 2016)。これは、学習者や教育者の置かれている特定の文脈や状況を深く理解し、そこでの彼らの経験や意味づけ、価値観を明らかにするエスノグラフィー (Wolcott, 2008) や特定の事例を深く記述するケーススタディ (Yin, 2013) のアプローチと共通する点が多々ある。

この「解釈主義的アプローチ」を基盤として、学修支援部門では、学内のアクティブ・ラーニング志向科目や学生の主体的な学習の取り組みを、参加者本人に取材するかたちで教育実践の事例紹介をしていく「学修支援部門ニューズレター」を発行することとした。

2. 学修支援部門ニューズレターの概要

2016年より年に2回（前期9月末，後期3月中旬）発行している学修支援部門ニューズレターは，2018年6月現在までに4号発行しており，各号で学生の主体的な学習活動に関わる記事を掲載している。本稿ではその内容を概観するとともに，本学のアクティブ・ラーニングの現状およびニューズレターの在り方を考察する（表1参照）。

	第一号(2016年10月)	第二号(2017年3月)	第三号(2017年10月)	第四号(2018年3月)
学習場面・対象者	アカデミックコア利用者	全共科目「学びをデザインする」受講者	アカデミックコア学生イベントの主催(学生スタッフ)	アカデミックコア学習相談(学生スタッフ+利用者)
内容	自学自習(授業準備や復習)の場としてのコアの利点や利用してみたの感想 ・積極的な話し合い，意見共有の場 ・プロジェクター付ホワイトボード，可動式テーブル，モニターなどの設備 ・学習意欲の向上	複合領域の課題探求型学習を通して学んだこと ・研究の奥深さ ・論文を読むことの大切さ ・情報収集・活用能力 ・学術英語向上の重要性 ・探求心の向上	学生スタッフ(留学生)の中国文化紹介のイベント企画とその活動を通しての学び ・イベント企画の動機 ・学生スタッフ活動からの学び ・今後の活動目標	学習相談を通しての気づき・ピアラーニング・ピアサポートの利点 ・学生スタッフ活動を通しての成長 ・丁寧なアドバイス(利用者) ・学習内容の理解の促進(利用者) ・学習の楽しさを知れた(利用者)

表1：学修支援部門ニューズレター掲載記事

第一号は，2014年にオープンしたアカデミックコアで授業外時間に予習をしていた利用者（教育学部3年）の6名にフォーカスグループを実施し，自学自習の場としてのアカデミックコアの利点に関する率直な意見を収集した。リラックスして自由に話し合える雰囲気の良い学習スペース，グループ学習で資料を全員と供覧できるプロジェクター付きのホワイトボードといった機材や設備，周りの目を気にすることなくプレゼンテーションの練習ができるグループ学習室といった利点を抽出することができた。また，コアのオープン前の自習スペースの不足や学生のニーズなどを明らかにするとともに，コアで定期的に学習するに至った経緯・経験を聞き出すこともできた。

第二号は，全学共通科目「学びをデザインする」の受講者4名にフォーカスグループを実施し，この科目での経験や学んだことを自由に話し合ってもらった。「学びをデザインする」は学生自身が興味のある課題を設定し，そのプロダクト作成にむけて指導教員を探し，助言を得ながら「研究」を進めていく課題探求型の授業である。本来の座学やグループ学習とは違い，期間内にレポートをまとめ，最終週に口頭発表を行う必要があり，主体的学

習が求められる。彼らは、この科目を通して、自分が活用する情報に責任を持つ意識の芽生えや、英語の論文を読むことの大切さや自分自身の研究の意義（例えば、何のために研究するのか）を深く考えることができたと言っていた。また、大学での教育は「教えてもらう」でなく「学んでいく」という学習観の変化が見られ、アクティブラーナーになる第一歩を踏み出したという声が多く聞かれた。

第一号：アカデミックコア利用者の声

第二号：学びをデザインする受講者の声

利用者インタビュー

実際にアカデミック・コアでどのような学びがなされているのかを、写真3の教育学部英語教育講座3年生6名（A-F）にお話を聞きました。（実施日2016年8月5日）

積極的な話し合い、意見共有の場
Int: この写真（写真3）では、どんな勉強をしているところなんですか。
A: これ（写真3）は、言語学の勉強なんです。授業でグループに分かれてプレゼンをするんですけど、英文を読んで、それをプレゼンするというので、その発表の準備をこのグループで集まって打ち合わせっかんじてやっています！
B: だからプレゼンの発表練習なんだよね。
C: パワーポイントのスライド作成や発表練習をここでやっていますよ。
A: 最初は、C君のパソコンでやってたんですけど、でも、みんなだと、見にくいね。みんなで話し合いながら、（スライドを）直していきないうちで、このコアのこれ（プロジェクター付きホワイトボード）使おうって思って（中略）
B: 大きいスクリーンがないと2,3人だけの話し合いになっちゃうので、こういうのがあると、みんなで見えやすいわっていいからスライドが作れるので、ここはこういうほうがいいよねとか全員で確認できたんです。

上記のインタビューより、アカデミック・コアが、学生がグループで積極的に話し合い、全員で見えやすい場として機能していることがわかります。インタビューから、プロジェクター付きホワイトボードを活用して全員の意見を反映させた発表スライドが作成できたそうです。

アカデミック・コアのオープン後の学習活動の変化
 アカデミック・コアがオープンする前は授業外にグループで学習する場が少なく、その場所を探すだけでも、とても苦労したそうです。図書館では、十分なスペースもなく、課題作成のためのディスカッションや英語での発表練習には、広くて話しやすい空間やグループ学習室があるアカデミック・コアが最適で、ほぼ毎日のように利用しているそうです。

A: 学科ごとに、一応、控室っていうのがあるんですけど、
B: 英語科の控室は、先輩方が論文書いてたりして、4年生が使うみたいなの感じなので、
C: 1、2年生の頃は、僕たちはあんまり使えなくて、勉強できる場所がなかったんです。
D: そういったときに、コアがオープンして、見た目もおしゃれな感じだったので、ちょっといいなって思ってたんですけど、

A: 図書館よりも、みんなが自由に話せたりして、ディスカッションがしやすい雰囲気だったので、



写真3: 専門科目でプレゼンテーションを行うための準備風景

受講者の声

「研究」の奥深さ・難しさ
 先行研究の論文をじっくりと読んでみると、やっぱりしっかりと書かれているなと驚きました。それを知ると、そこまで自分の調べたことに自信が持てないというか、結構、勉強しても過去に研究されていた方々に追いつける自信がなくなってしまうというか、研究者と自分の差を、論文を読んで深く感じてしまいました。自分自身、勉強はするんですけど、彼らのようにはならないな、奥深いなというふうに感じてしまいました。
 [応用生物科学部1年]

論文を読むことの大切さ
 他人に「この英語論文、読んで」って言っても、難し過ぎてすぐには読めないと思いますよ。僕は最初、繰り返し時間をかけて読んでたので、今はじっくり読むと理解できます。だから、この分野に関しては、丁寧に読んでみるようにしていきなうちで、そういう感じで、昔から読んでないけど読みたいことが多いので、その辺はやって良かったかなと思います。論文を読むことが大切なんだよ。
 [応用生物科学部1年]

情報収集・活用能力
 この授業を通して、情報収集能力が上がったと思います。情報に責任を持つようになりました。積極的に発表するの、きちんとしたことを書かないといけないし、しっかり何回も発表内容を確認する必要があるんですよ。信頼のある情報を見出すというか、「著者」として責任を持つようなものも仕込まれたかなと思います。
 [応用生物科学部1年]

英語力の重要性
 この授業を通して、先を見据えることができたというか、将来のために自分がどうするべきかを考えさせられました。例えば、理系で世界の最先端のことを知るには、英語力が必須だなとか実感することができました。
 [工学部1年]

学習に対する意欲・探究心
 「学びをデザインする」では、アドバイザー教員からサポートもしていただけたので、自分のテーマを自由に研究することができるので、何か興味や好きなことがあって、その科目の先生が大学にいらしたらいいかな、この科目は取るべきかなと思います。
 [応用生物科学部1年]

**この授業では、深い人たちに会えたという感じがします。英語の論文を読む語学力を持っていたり、一つのテーマについてすごく深いところまで調べている人がいたり、刺激になって良かったです。自分を磨らなくにはと思いました。だから、勉強するモチベーションが高まったとは思っています。ScFinderなどで英語の論文に触れることが結構新鮮で、この期間やり続けたい。やったあ、みたいな勉強熱・達成感があります。
 [工学部1年]**

**「学びをデザインする」は、とても素晴らしい授業だと思います。というか、これがむしろ大層じゃないのかな。学部の授業よりこっちのほうが楽しいです。詰め込み教育じゃない、何かアカデミックだし、自主性を尊重してくれるところがいいなと思いました。自分の勉強していた大学の授業というものが多分こういうもので、詰め込み教育は嫌いなので、こういうのせいで学習がもやもやしない、全共だけしかの授業はなかったかなと思います。
 [工学部3年]**

**ずっと自分の中で研究や、大学生になったら知識を深めたいと思っていましたんですけど、1人でやるよりも、アドバイザー教員の先生に教えていただくながら、まとめていくことで、かなり深い内容になったと思っています。なので、1人でやるよりも充実したかなと思っています。
 [応用生物科学部1年]**

第三号は、アカデミックコアの学生スタッフで中国からの留学生に対してインタビューを行った。彼らは多くの日本人学生に中国文化を理解してもらいたい、中国語に興味を持ってもらいたいという気持ちで学生イベントを企画していた。学生スタッフとしての活動を通して、彼らは「発表」や「教える」ことは自身の勉強にもつながるといふ気づきを得たり、多くの学生・教員と交流する機会が増え、日本語の勉強にもなっているという。特に、中国語に関するアドバイスをし、学習相談の依頼者である学生が上達していく姿を見るとうれしい気持ちや達成感を得て、自分自身の学習へのモチベーションが高まったという声もあった。

第四号は、「恋愛と数学」というイベントを企画した学生スタッフの意図を聞いた。一見関係のないような日常生活の場面に数学が深く関わっていることを知ってもらうことで、数学の楽しさを伝えたいという強い気持ちを持っていた。また学習相談にも熱心に取り組んでおり、「教える」というより「一緒に考える」スタンスで臨んでいることがわかった。

本号では学生スタッフ側の視点だけでなく、学習相談の利用者へのインタビューも試みている。時間をかけて一緒に考える姿勢、一人一人にあった対応、気楽に学習内容や疑問を話せる雰囲気、など利用者の視点から学習相談の実情を記述することもできた。

第三号：学生スタッフ（留学生）の取り組み

学生スタッフインタビュー

Q: どうして、このイベントを企画しましたか？

R: ナイセイ: 私は、普段コアで中国語を教えています。皆さんに中国の文化を知り、少しでも中国語を勉強したいという興味を持ってもらいたかったんです。それで、こういうイベントを企画しました。今日はみんな来てくれて、本当に嬉しいです。このイベントを通じて中国の文化を伝える、そういう役割がもたらした。

Q: 今後、コアのスタッフとしてどのようなことに取り組んでいきたいですか？

R: ナイセイ: 私はもちろん続けて中国語を教えます。あとは英語も勉強していますので、もっと英語も教えたいです。自分が深く勉強できないと多分皆さんに教えるのは難しいかなと思っていますので、こちらに来てから私もちゃんと勉強しないといけないと思うようになりました。あと私もよくこのコアを利用してしますので、こうやって勉強したいとか、コアの活躍のアドバイスもしたいと思っています。

Q: 留学して、自分の国の文化と自分の国に関するものを日本人の友達に紹介したいと思っていました。もともと、今期、リ・テイセイさんがこのイベントをやることになって、中国の文化を紹介することはすごくいいと思いました。学生が楽しいと思ったら、次にその文化の紹介が何か、この地域はどのような地域、中国でも同じような地域があるのかとかいろいろ考えたりして、次にその文化の紹介が何か、この地域は、毎日できないけれどもいいけど、何回かに、いろんなイベントができるように頑張りたいです。

Q: 学生スタッフの活動をを通して、自分自身も学べていることはありますか？

R: ナイセイ: クラスメイトと一緒にいる時間は送られています。なかなか友達に話す機会がほとんど。こちらに来てコアの学生スタッフや職員の方と一緒に働いて、日本語を勉強し始める機会が増えました。そして、こちらでよく正しい日本語を学ぶことができます。中国語の勉強に来た学生に、中国語の勉強について教えました。日本の文化はみんな中国語の勉強が得意になっていきました。これは私にとって、本当に達成感があります。向こうで来た友達と仲良く話せること、本当に役に立ってなっています。

R: ナイセイ: 学生相談で、問題とか留学の問題があるとき、日本人の学生が海外に留学したい場合はこちらに来て相談して、海外で生活するようになるんです。手順はどうなるか、それを相談しました。一緒に考えてアドバイスをするので、自分もみんな成長していると感じました。人に協力できることがうれしいと思います。



インタビューに答えるリ・テイセイさん (右)



学習相談に答えるリ・テイセイさん

第四号：学習相談の利用者の声

【学習相談】

学習相談では学習に関わるいろいろな相談に応じています。学生スタッフの得意分野を生かして、「～する方法を教えてください」とか「～の解き方を教えてください」とかがあります。実際上注意していることとして方法を伝えることよりもなぜその方法なのかとか原理や法則の背景はなんであるのかとかを重視して伝えることにしています。

学習相談の利用者の声

学習相談を利用している学生さんにお話を聞きました。
(工学部3年 永井隆直さん)

Q: 学習相談を利用されてどうでしたか、感想を聞かせてください。

R: 私は、答えだけ確認するみたいなのは、確認がそもそも大嫌いって理由で通ってはいけなかったんですけど、ちゃんと理解して、自分に合うようにしていきやうって言うのがあるの、答えだけ教えるといくのはちょっと苦手ですね。そういう意味では、教えてもらう方がありがたいです。中国語も、ちゃんと理解を、これは何でだろうとか聞きやすいですね。大学の先生は忙しいかなとかいろいろ考えちゃって聞けなかったりしますが、学生さんだと年が若いのもありますし、いろんなことを自由に聞きやすいというのがあります。

【丁寧なアドバイス】

学生スタッフさんは時間をかけてしっかりと教えてくれて丁寧というか、例えば中国語とかですと、どういふ口の形をしたらこの発音ができるかとかを実際に見せて一緒にやってくれたりとか、紙等で画像を撮って、こういう感じとこういうふうに置くといいとか、授業では、一対一でこれがわからん、これがわからんとかは全然できないですから、一人一人に合わせて、いろいろやってくれるので。

【楽しさ】

学習相談に行くのは楽しいですよ。楽しいです。授業ですらどうしても話を聞くことが多いので、でも、それよりかは、学生スタッフさんとかやってみるといいからだよ、自分もいろいろ考えられますし、それでいてたまにちょっと変わったりとか得意なんで、そういう面白さが楽しかったり。

私の友達でも勉強がわからないと置いている人が周りにすくなくはいっぱいいるので、アカデミック・コアの学習相談のことをたぶん知らないと思うんですけど、もっと多くの人に活用してもらいたいかなって思っています。



さらに、第三号より岐阜大学のアクティブ・ラーニングを促す各学部・学科の工夫や取り組みを紹介していく特集を企画し、工学部機械工学科（第三号）と医学部看護学科（第四号）の授業をインタビューで得た学生の声を交えながら紹介している（表2参照）。

	第三号（2017年10月）	第四号（2018年3月）
学習場面	工学部 3年次（必修） 「機械工学演習」「知能機械工学演習Ⅲ」	看護学科（1～4年次） 卒前教育での主体的学習を促す方略
内容	岐阜大学と県内企業や地域の金融機関、岐阜県が一体となって進める課題探索・解決型の授業。	ディベート、グループ学習、事例展開演習、ライブ・スーパービジョン等での学び
受講者（学生）の声・学んだこと	<ul style="list-style-type: none"> 設計や製作企業の目線で課題に取り組むことができた 先生のヒントから自分で調べて解決できた。チームワークも求められた。 自分たちで最善の方法を考え実践するプロセスを学べた。 座学で学んだ内容を関連付け、実践できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的な意見共有、質疑応答を通して議論の深め方を学んだ。（グループワーク） 価値観の違いの気づきや看護師としての倫理観、患者・家族中心のケアの重要性を学んだ（ディベート） 多角的なアセスメントの重要性の気づき 「個々の患者に合った看護」を考え実践する力（ライブ・スーパービジョン）

表2：学修支援部門ニューズレター（学部・学科の取り組み紹介）

工学部の機械工学演習や知能機械工学演習は、学生は配属先（学科の研究室および岐阜県内の企業）で、自ら課題を見出し探求・研究していくという演習である。エンジニアとしての基本的な態度や考え方の習得や、ものづくりの楽しさを感じる事が大きな目的となっている。また、看護学科では、個々の患者のニーズに合った最善のケアを看護師間、多職種間での話し合いを通して決定し実践できる力を有する人材の育成を目的の一つとし、4年間の卒前教育を通してグループ学習やディベートなどアクティブ・ラーニングを促す教育手法を積極的に取り入れている。取材に応じた両学科の学生とともに、これまでの学習経験とは違い主体的な学習姿勢が強く求められる環境下で、他者との対話を通して学習課題に積極的に取り組み、エンジニアとして、また看護師としての自覚を持つことができたことを述べている。

第三号：工学部機械工学科の取り組み



第四号：医学部看護学科の取り組み



3. ニュースレターの取材・編集を通して

筆者は、学修支援部門広報チームリーダーとしてニュースレターの制作に携わってきたが、インタビューの協力者との日程調整や原稿執筆および編集・校正など、学修支援部門委員の教員や事務職員、アカデミックコアスタッフの協力が必要不可欠であった。また、アカデミックコア学生スタッフには、インタビューへの同席やコアの活動紹介の原稿執筆・校正、写真の編集など、できるだけニュースレターの制作に携わってもらうようにした。この制作を通して学生自身の活動の振り返りやアクティブ・ラーニングへの意識、ニュースレターの制作者としての当事者意識を促すことができたかもしれない。また、ニュー

ズレター制作に学生を関わらせることは、特集記事の企画力やリーダーシップ、取材に必要なコミュニケーション能力、編集に関わる文章構成力などが求められ、それ自体が教育的意義のある活動だといえる。今後は、ニュースレター制作を通しての学びに関して、学生スタッフに取材してもいいかもしれない。

本ニュースレターは、学修支援部門のホームページ上にリンクを貼り、電子媒体としてダウンロードすることはできるが、それをできるだけ多くの人に読んでもらう更なる工夫が必要となる。発行時に周知メールを教職員には流しているものの、どれくらいの人がこの存在を知り、目を通してきているかは疑問である。つまり、広報として十分に機能できていないのが現状であり、発行後のニュースレターの周知・活用方法の検討が今後の課題となる。

大学教育の質転換がさげばれる中、アクティブ・ラーニングを促す取り組みの教育効果の検証は、客観的データの分析結果の一般化を目指す量的研究アプローチが主流である。対象となる状況やサンプルが限定的、局所的で、主観的データを扱う質的研究アプローチは、量的研究の評価基準によってしばしば批判されることがある。久保田(1997)が指摘するように、構成主義パラダイムでみられる多様な質的研究方法(会話分析、アクション・リサーチ、事例研究、インタビュー調査など)を一元的な評価基準に当てはめることは、その評価を一面的にしてしまうおそれがある。「質」をみるための基準は「絶対の物差し」ではなく、緩やかな視点で判断するガイドラインという位置づけがふさわしいといえる(久保田, 1997)。

Wilson (1973) は質的研究の評価ガイドラインとして、研究成果の「移転性」をキーワードとして挙げている。「移転性」は、質的研究で示したストーリーやそこからの示唆を他の読み手の状況に当てはめ応用できるかどうかということである。この判断は、読み手にゆだねる必要があり、そのためには研究対象となる文脈や状況、研究成果に対しての「分厚い記述」が求められる(Geerts, 1973)。この点で、当事者からの学びを捉えた事例の蓄積は本学のアクティブ・ラーニングを促す有用な教育的情報になりうる。解釈主義的アプローチにより学習活動のプロセスや当事者の視点を描いたニュースレターに触れることで、学内外の読み手が自分自身の教育実践を省察し、アクティブ・ラーニングを促す工夫や学習者－教育者の関わり方を考えるきっかけになれるよう、内容の充実化や広報の方法を検討することが今後の課題となる。また、教育の質転換の検証において、量的研究に加えて、教育者や学習者の当事者視点から実際の経験や認識、学習プロセスを明らかにする質的研究を積み上げていくことが今後重要になってくる。

【注】

1) 岐阜大学教育推進・学生支援機構 学修支援部門のホームページより参照できる。

https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/learning_supporting/ALS_active_learning/active_learn

ning.html (平成 30 年 7 月 2 日確認)。

2) Albert Einstein の言葉とする説もあるが, Quote Investigator によると Cameron の著書 (1963 年) 以前に, この言葉の記録が確認できないため, 本稿でも Cameron の言葉とした。https://quoteinvestigator.com/2010/05/26/everything-counts-einstein/ (平成 30 年 6 月 27 日確認)。

【参考文献】

加藤直樹, 海野年弘, 篠田成郎 (2016) 「平成 27 年度学習支援部門活動報告」『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第 2 号, 17-38 頁。

久保田賢一 (1997) 「質的研究の評価基準に関する一考察 パラダイム論からみた研究評価の視点」『日本教育工学雑誌』第 21 号, 163-173 頁。

岐阜大学教育推進・学生支援機構学修支援部門広報チーム (2016) 『学修支援部門ニューズレター』第 1 号。https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/05d644cedb14a4dec068df3ae5f45ddb.pdf (平成 30 年 6 月 27 日確認)。

岐阜大学教育推進・学生支援機構学修支援部門広報チーム (2017) 『学修支援部門ニューズレター』第 2 号。

https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/%E5%AD%A6%E4%BF%AE%E6%94%AF%E6%8F%B4%E9%83%A8%E9%96%80NL2.pdf (平成 30 年 6 月 27 日確認)。

岐阜大学教育推進・学生支援機構学修支援部門広報チーム (2017) 『学修支援部門ニューズレター』第 3 号。https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/618522f3f9f6e657a9d573768d8d4d14.pdf (平成 30 年 6 月 27 日確認)。

岐阜大学教育推進・学生支援機構学修支援部門広報チーム (2018) 『学修支援部門ニューズレター』第 4 号。https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/gakusyushien%20newsletter%2004.pdf (平成 30 年 6 月 27 日確認)。

篠田成郎, 今井亜湖, 仲田久美子, 神谷宗明, 肥後睦輝, 西村貢, 西本裕, 高橋由起子, 田中雅宏, 山口忠, 加藤正吾, 西津貴久, 松原正也 (2017) 「課外学習における AIMS-Gifu 活用効果に関する分析」『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第 3 号, 131-143 頁。

山田剛史 (2018) 「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』第 18 号, 155-176 頁。

Cameron, W. B. (1963) *Informal sociology: A casual introduction to sociological thinking* (Vol. 21). Random House.

Geertz, C. (1973) *The interpretation of cultures*. Basic, New York.

Imafuku, R., & Bridges, S. (2016). Guest Editors' Introduction: Special Issue on Analyzing Interactions in PBL—Where to Go From Here? *Interdisciplinary Journal of Problem-Based Learning*. 10(2).

Neuman, W. L. (2013). *Social research methods: Qualitative and quantitative*

approaches. Pearson Education.

Reeves, S., Fletcher, S., Barr, H., Birch, I., Boet, S., Davies, N., & Kitto, S. (2016). A BEME systematic review of the effects of interprofessional education: BEME Guide No. 39. *Medical Teacher*, 38(7), 1-13.

Wilson, S. (1979) Explorations of the usefulness of case study evaluations. *Evaluation Quarterly*, 3, 446-459.

Wolcott, H. F. (2008). *Ethnography: A way of seeing* (2nd ed.). Lanham, MD: Altamira Press.

Yin, R. K. (2013). *Case study research: Design and methods*. Thousand Oaks, California: Sage Publications.

【謝辞】

学修支援部門ニューズレター発刊に際して多くのご意見をいただいた加藤直樹先生，篠田成郎先生，海野年弘先生，松原正也先生，廣内大輔先生に感謝申し上げます。また，制作，編集，校正にご協力いただいた広報チームの委員の先生方，アカデミックコアスタッフおよび全学共通事務室 前修学支援係長 堀哲朗氏に謝意を表したい。